

ヤマヨモギ繁る荒野 クロスオーバーする記憶

鈴木 修治

(生活協同組合コープぎふ)

ソルトレイクシティからの国際小包がわが家へ届いたのは、去年の暮れのことだ。日系二世のリリー・ヘイビー (Lily Havey) さんが、彼女の本の出版を手伝ったお礼にと送ってくれた。小さな箱を開けると、見た目にもきれいな六粒のチョコが中からあらわれて、しばしわたしは幸せな気分になることになった。

リリーさんが本を書いたのは五年ほど前のことだ。それは、家族とともにコロラド州の強制収容所へ入れられた際の記憶にもとづく、三年半に及ぶ記録である。彼女はその記憶をもとに、絵を描き、事実を調べ、文章を書いた。そして美しい一冊の本にまとめた。わたしが手伝ったのはその邦訳版の編集作業である。

わたしが彼女から依頼を受けたのは春のことだった。自分はもう九十歳になるから残された時間が少ない、だから早くこの本を日本で出版したい、そんな彼女の切実な気持ちが伝わってきた。翻訳作業は彼女の友人の翻訳家がすでに終えていて、わたしは、その夏の休日を、パソコン作業に没頭することになったのだった。

リリーさんは1932年にアメリカで生まれた。彼女の母親は広島県出身の日系一世である。母は幼いころの娘を見て、あなたは猿みたいで落ち着きがないから、「ガサガサだ」としばしば評した。その母の言葉に思い出があり、リリーさんはみずから「ガサガサ・ガール (GASA GASA GIRL)」と表現した。『ガサガサ・ガール、キャンプへ行く 日系人少女の見た強制収容所』というのが彼女の本のタイトルだ。

彼女の母親は現在の広島県三次市にある寺に生まれた。彼女が結婚を機にアメリカへ渡ることになるのは、1920年ごろのことである。結婚のきっかけは、彼女が広島市内の電信局に働いていた時に、そこで花嫁募集の記事を見たことにある。父親はそれにずいぶん反対したそう。けれども彼女がもしその花嫁候補に応募をしなかったなら、リリーさんはきっと生まれていなかったことだろう。この電信局の建物はのちに原爆によって壊滅している。

リリーさんは母親から断片的に日本語を教えられていたし、日本との戦争が始まる前には当時住んでいたカリフォルニアの日本語学校にも通っていた。けれどもその後はアメリカ市民として教育を受けた。だからいまではほとんど日本語の読み書きはできない。

アメリカ政府は日本との戦争が始まると、1942年2月に大統領令を発して、約十二万の日系人を国内各地の強制収容所に抑留した。リリーさんが収容されたのは、コロラド州のグラナダという町に近い砂漠の中の、アマチ（Amache）収容所というところだ。ここに収容された日系人は、そのほとんどがカリフォルニア州から連れてこられた。

ソルトレイクシティでは、ユタ日報という邦人紙が発行されていた。創刊したのは寺澤畊夫さんという日系一世で、その娘がリリーさんの校友だった。母親が存命のころ、リリーさんの自宅では、よくテーブルの上などにユタ日報が置かれていたのを記憶している。

このユタ日報は、戦争が始まって以後も発行を続けていた。大戦の戦況などを伝えるとともに、収容所内の日系人たちの暮らしを記録し続けた。1942年の秋になると、その紙面に「グラナダ便り」という見出しで、アマチ収容所内からの短信が載り始める。10月16日にはつぎのような記事がある。

「中央自治制成立 未だ混雑中で行政機関が本格的に組織が出来なかったが 当局では中央行政機関を設置してそれに適当すべき各区からの参事員を迎えるようになった（三十区域）勿論被選挙者は市民権を持つ二世に限られているが 各区から一名づつの顧問が行政官に依って任命さるる由」

政府は日系人を強制的に収容しながら、その所内では住民の自治を認めようとしていた。アマチでは、サンタアニタ（Santa Anita）とマセド（Merced）という二つの一次収容施設から送られた日系人が暮らすことになったが、このころ双方からの収容者のあいだには社会的な軋轢があったことも短信は伝えている。

そのころリリーさんの父親は、収容所から外へ働きに出ることを許されて、たびたび出稼ぎの仕事に出かけた。まだ幼かった彼女にとって、そうした父親の不在は寂しさを感じさせるものだった。

ユタ日報の10月28日の記事は、このときすでに収容者七千人のうちの千人が所外への就労を許されていたことを伝えている。戦時下のアメリカ社会は、収容所に抑留した日系人を、その一方では労働力として必要としていたことがうかがい知れる。

そしてまた一方で、収容所内に留まって日常生活を続ける日系人にとって、荒涼とした砂漠の中に孤立させられた日々は耐えがたいほど味気のない

ものだった。彼らは、園芸や農作業、手芸それから文芸といった活動に打ち込んで、そうした毎日に彩りを添えるようになる。ユタ日報はやがて文芸欄にその紙面を大きく割くようになり、各地の日系人収容所からの詩歌が紙面を飾るようになる。

ここに取り上げる二編の詩は、アマチ収容所の生活のようすや人々の心をよく表現していると思う。

『この面影 この誓ひ』グラナダ 坪根守人

赫赫と燃え出づる

沙漠の果に

朝の太陽は

思案の泉

○

握るシャベルに

流るゝは 紅い血潮

同胞よ 今日の想ひを

永遠の 金字塔に

面影 刻まらん

○

落つる涙に

成行きは水泡に歸り

残るはこの誓ひ

そは 異國の身なれど

盡す道は彼方なるを

『明日の光に』 グラナダ ハリ・キダ

砂嵐は吹く

人らはおもむろに

心を亂す朝だ

コーヒは如何ですかとご挨拶は始まる

コーヒーなき朝に

不平の聲ひろがる

汝等 己が

運命に囚われしもの

○

立ち働く人々

頸いためたる労働者

流れの運命に

何で不平を言はう

世はやくざの生くるとこ

心を改めて

明日の光に

希望を抱かうと

日本との戦争が終わろうとするころ、アメリカ政府はひとつの大きな問題に直面する。国内各地に強制収容した十二万もの日系人を、みずからの責任で元の生活へと戻らせていく必要があった。アマチで暮らした日系人たちは、その多くが、収容所から解放されるとアメリカ中西部へ移り住むことになった。

リリーさんの場合は、親戚のつてを頼って、母や兄とともにソルトレイクシティへ移り住んだ。当時アマチからこの街へ移り住んだ日系人家族は、リ

リーさんたちだけだったらしい。そしてそれとは別に、ここから南へ約二百キロのところに置かれたトパーズ収容所から、多くの日系人が移り住んできた。戦争が終わって十五年後の1960年の調査では、2399名の日系人がソルトレイク郡に住んでいる。

1991年、ユタ日報が廃刊となる。七七年間にわたって日系人社会に果たしてきたその役割を終えたのだ。一世日系人の子や孫たちはもう十分にアメリカ社会に溶け込んでいた。リリーさん自身が日本語の読み書きをできなかったが、子や孫たちも日本語はわからないし必要なかった。

リリーさんによれば、ユタ日報の発行所があった建物はソルトレイクシティ中心部の日本人街の通りにあった。その建物は、その後ずっと空き家になっていたが、印刷に用いた日本語の活字はそこにそのまま保管されていたという。けれども最近になって泥棒に入られ、活字はすべて持ち去られてしまったそうだ。

リリーさんがアマチ収容所の跡地を再訪するのは1998年のことである。ノルウェー移民の夫とのあいだにできた息子がこの旅に同行した。

2020年7月、収容所跡地でおこなった発掘調査をもとにした「Finding Solace in the Soil」という本が出版された。デンバー大学のボニー・クラーク教授が書いた。リリーさんはその調査に協力した一人だ。おどろくべきことに、この調査では、一世たちが園芸用に持ち込んだ日本由来の植物の痕跡が見つかっている。その庭園づくりの技術はまさに彼らが日本から持ち込んだものだそうだ。ここには農業文化のクロスオーバーが見られる。

そしてリリーさんの本の邦訳版は昨年秋に日本国内で出版された。リリーさんと訳者の高作自子さんとわたしの共同作業によって自費出版で実現した。当初この原稿は出版社への持ち込みを行ったが、そのとき編集者から言われたのは「これは日本人がもっとも関心のないテーマ」という言葉だった。日本の社会はいまだに閉鎖的だ。

わたしは日本に住むリリーさんの親戚に会ってみたくなり、京都と和歌山に住む従弟たちに手紙を書いた。予想に反して彼らの反応はあまりよくなかった。日本人にとって、日系人収容所はもう遠い地の過去の出来事なのかもしれない。

収容所のあたり一帯にはsagebrushが繁茂している。リリーさんは本の中でこの野草のことを単に「brush」と表現した。一方高作さんはリリーさんとともにこの場所をおとずれたことがあり、そこに生えているのがヤマヨモギであることを知っていたので、これを「ヤマヨモギ」と訳した。

その高作さんにはヤマヨモギの思い出がある。ソルトレイクシティへの留学時にボランティアでナバホ族の村を訪れたことがあり、そのとき体調を崩してしまった。ホームステイ先のお宅でおばあさんから親切にしてもらったのだが、そのときそこに立ち込めていたのがこのヤマヨモギを焚く匂いであった。

ヨモギはわたしが愛用する日本の薬草でもある。種類は違っても、そして根付いた土地が遠く離れていても、それぞれ薬効のある植物なのだと知らされた。高作さんとわたしのメール交換がヨモギの話題で盛り上がったのは面白かった。

記憶は語り継がれる必要がある。リリーさんの記憶も、ボニー教授や高作さんのそれも。そしてそれぞれの記憶がクロスオーバーしながら新しい時代が形作られていくことと思う。

わたしは定年退職を迎える 2025 年にはソルトレイクシティにリリーさんを訪ねる約束をしている。